「図書館活用法」プログラム評価活動報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2013-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久松, 薫子, 西脇, 亜由子, 矢野, 恵子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16012

「図書館活用法」プログラム評価活動報告

久松　薫子*
西脇　亜由子**
矢野　恵子***

1. 図書館活用法への「評価」導入まで

明治大学では「教育の場」としての図書館の積極的な活用を推進しており、図書館においてさまざまな教育活動を実施してきたが、そうした取組みによって2007年度に「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP)」に採択が実現した。現在明治大学図書館で実施している情報リテラシー教育・図書館利用教育を具体的に挙げると、図書館活用法・ゼミツアー・デジタルコンテンツ作成・フリーツアー・出前講義・各種ガイダンスなどさまざまである。これらの教育活動は多元的に展開されているが、なかでも体系的な情報リテラシー教育を目指しているのが、全学部生を対象とした学部間共通総合講座「図書館活用法」という半期2単位の選択科目である。この講座への取組みは、図書館を単に「学術情報の集積地」にとどめず「教育の場」として積極的に位置づけ、図書館の活用を教育課程に組織的・継続的に取り込もうとするものである。

---

* ひさまつ・くにこ／明治大学学術・社会連携部図書館事務室図書館管理グループ
** にしわき・あゆこ／明治大学学術・社会連携部図書館事務室中央図書館グループ
*** やの・けいこ／明治大学学術・社会連携部図書館事務室中央図書館グループ

「図書館活用法」は、2000 年度から開講されているが、明治大学の教員と図書館員が協働して講師を務めている点が大きな特徴である。開講以来、年度ごとに講座内容の見直し、学生へのアンケートや講師間での意見交換などを行い、その内容改善に努めてはきた。しかし従来の講座運営においてはこうした改善へ向けた努力の成果が十分見られたとは言えない。複数の教職員が駿河台・和泉・生田という複数のキャンパスで講師を務めるという特性上、一連の講座の体系性や総合的なバランスを維持するためには講座全体に対する講師間の共通理解が不可欠だが、この点について全ての講師に十分に確認されてこなかったためである。そうした状況が学生の授業評価や講師担当者からのプログラム内容見直しの意見にも表れていたと思われる。

講座内容の見直しへの要望に加えて、図書館の持つ教育効果を評価しようとする内外の気運の中で、本学の「図書館活用法」についてもその教育効果を明確かつ包括的な方法で測定できないか模索され始めていた。こうした動向を背景に、特色 GP 採択が契機となり従来の講座（プログラム）運営において組織的・体系的には行われていなかったプログラム自体の評価、すなわち「プログラム評価」が必要、という認識が生まれたのである。

なお、今回の「図書館活用法」プログラム評価に際しては、教育プログラム評価を通じプログラム内容の改善と強化を図るプロジェクトに数多く携わってきた研究者をハワイ大学よりコンサルティングチーム[1]として招き、2008 年度前期の評価活動に関する助言や評価活動トレーニングを受けることとした。

2. プログラム評価と活動概要

2.1. プログラム評価

今回指導を受けたハワイ大学ノリス教授は、プログラム評価について、

[1] コンサルティングチームはジョン・ノリス、渡邊有樹子、キャッスル・シニクロープの 3 氏で構成されている（敬称略）。

「プログラムについて共通理解や改善を図ったり、価値を明らかにしたり、存続を判断したりと、多様な目的のためにプログラムに関する情報を系統的に収集する活動である。評価はプログラムの問題点を明らかにし、証拠を用いて解決へと改進する」と述べている[2]。この中でノリス教授が強調するのは、まずどのような目的のために、なぜ（WHY）評価をするかを明確にすることから評価を始めるという点である。評価をするというと、どのように（HOW）という方法論に飛びつきがちである。しかし、目的がはっきりしないまま評価を始めても、結局は必要な情報が得られずに終わってしまうことになる。目的をまず考えると、その目的を達成するために必要な情報、そしてその収集のための最適な方法というのも、自ずと見えてくる。そのために評価の目的設定は大切である、というのがノリス教授の考えである。

また、評価というと、学生の能力があがったのか、という学生の学習成果のみに目がいきがちでもあるが、この評価活動は単なる学習成果測定のアセスメントではない。学習成果アセスメントは学習者に焦点をあて、その能力向上や学習成果に対するプログラムの教育効果を見ようとする活動だが、上にも述べたとおり、プログラム評価の焦点はプログラム自体であり、活動によりプログラムの価値を明らかにしたり、共通理解や改善を図ったりするものである。プログラムの価値を明らかにするための一つの手段として、学習者の学習成果を見ることも考えられるが、プログラム評価自体は、学習成果測定のアセスメントよりも広い概念で考えなければならない。

この評価のもう一つの特徴として、内部者が中心になって行う活動であることが挙げられる。いわゆる第3者評価にあたるような外部の目から見た評価ではなく、実際にプログラムの方向性を決めている関係者による評価活動であり、評価結果がその後のプログラムに必ず具体的に反映できるような形で行われている。

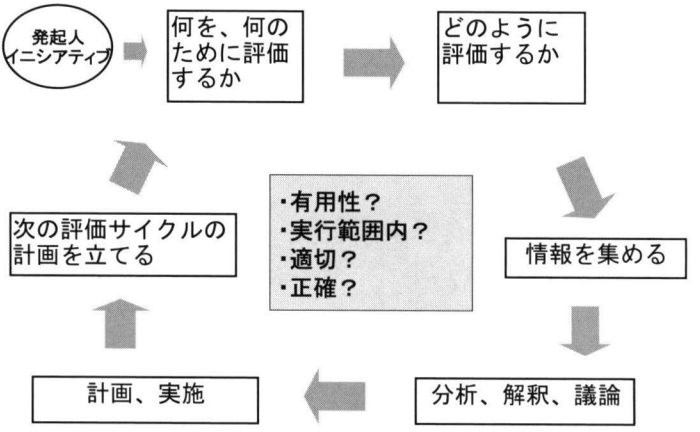
---

[2] Norris, J. M. (2006). The why (and how) of assessing student learning outcomes in college foreign language programs. Modern Language Journal, 90 (4), 576-583

2.2. プログラム評価活動概要

プログラム評価の流れは図1のように表すことができる。この流れに沿って、今回の活動の概要を説明する。

図1　評価概観とステップ



まず「何を」評価するかについて、現在図書館で複数行っているリテラシー教育のうち、今回は「図書館活用法」を取り上げることにした。活動の中心グループは、従来図書館活用法のカリキュラムを決定してきたタスクフォースのメンバー（図書館事務長、担当職員と図書館活用法コーディネータの教員（図書館副館長））と、図書館評価に比較的関心が高く、実働的に評価活動を進める意欲のあるメンバーで構成された評価チームである。このグループを中心とし、評価の目的、方法を検討し、活用法授業のいわゆるステークホルダーである学生、講師、教員、学内組織などから情報を集め、それを分析、解釈、議論するという流れで進んでいく。

今回の評価目的は、タスクフォース、評価チームを中心とし、ワークショップやアンケートなどで他の図書館員、活用法講師の意見を踏まえ次のように設定した。

1. 図書館活用法の学習達成目標を明示する
2. 学習達成目標を明確化し、カリキュラム内容と構成を改善する
3. 大学全体における情報リテラシー教育の目指すものを明確化し、その中での図書館の教育的役割を提言する

また、評価の直接の目的ではないが、長期的に評価を行うことのできるスタッフの育成、全教職員の評価取り組みへの理解と協力も、取り組みの目標とした。

そして、上記3つの目的を達成するために解決すべき課題として立てたものが、次の2つである。

課題 1：学生・活用法講師・図書館職員・学部教員・図書館外学内組織の情報リテラシー学習/教育ニーズから見られる学習達成目標とは何なのか？
課題 2：現在の学習内容で学習/教育ニーズが反映されているのか？

評価活動は、この2つの課題を解決するのに必要な情報を集めるという形で行われる。課題1はさらに詳細に、次のような具体的質問とした。

・図書館外で行われている情報リテラシー教育とは何か
・図書館に期待される情報リテラシー教育はとは何か
・1・2年生、3・4年生のカリキュラムは異なるべきか
・人文系と科学系のカリキュラムは異なるべきか
・レポート・論文指導はどこまでするべきか
・導入教育としての位置づけであるべきか
・図書館活用法以外で扱える内容はあるのか

これらの質問を誰に、どのように聞くべきかを検討をし、その結果、授業履修学生、活用法講師・図書館職員、学部教員、学内他組織という4つの

グループに対し、アンケート、インタビューという形で聞いていくことにした。2008年12月現在、授業履修学生（駿河台、和泉、生田校舎）、活用法講師・図書館職員へのアンケートはオンラインですべて終了、学部教員へのアンケート（オンラインおよび紙）は配布終了、回答集計中、学内他組織へのインタビューは計画の段階にある。すべての情報収集が終わった後、集めた情報を総合的に分析、検討して具体的な質問に答えていき、最終的には始めに掲げた3つの目的を達成することで、評価活動の1サイクルが終了する。

3. プログラム評価のための調査

以下に終了したアンケートについて報告する。

3.1. 駿河台学生アンケート

3.1.1. アンケート概要

駿河台学生アンケートは、2008年前期に駿河台キャンパスで図書館活用法を履修した学生を対象とし4月（以下、4月アンケート）と7月（以下、7月アンケート）の2回実施した。この授業を履修する学生は学部3・4年生で、学部間共通総合講座であるため、学部の種類は様々である。

4月アンケートのアンケート項目は授業初回に行った小アンケート回答をテーマ分析し作成したもので、（A）挙げられた内容に関して、「どの程度授業を通じて学びたい・身につけたいと思うか」を問うものと、（B）図書館活用法の受講のきっかけとして、アンケート中に挙げた項目がどの程度貢献したかを問うものとした。

一方、7月アンケートは学生のバックグラウンド、授業評価のほか、4月アンケート時に学びたいとして挙がった項目（A）が身についたかどうか、そして活用法を通じて身につけたい項目を問うものとした。この「身につけたい」項目は図書館活用法講師と図書館職員対象のアンケートと同じ項目とし、後で比較が出来るようにした。

3.1.2. アンケート実施時期、分析方法

4月アンケートは図書館活用法第3週授業時の4月30日に実施、7月アンケートは授業内で実施を告知し、7月19日より5日間の期間内に回答してもらった。

両者共にSurveymonkey[3]というソフトによるWebアンケートの形式をとった。どう思うかを問う内容の項目は、「全く思わない」「あまり思わない」「ある程度思う」「非常に思う」、および「どちらとも言えない」か「判断できない」の選択肢から選択して回答する形式をとり、各選択肢の占める割合を算出するとともに「全く思わない」を1、「あまり思わない」を2、「ある程度思う」を3、「非常に思う」を4と数値化し、平均値・標準偏差（SD）を算出した。このうち「どちらとも言えない」か「判断できない」は数値化せず、回答数のみ集計した。また、ほかに自由回答の欄も設けた。

こうして数量であらわされた量的データと自由回答の質的データの2種類を得た。このうち質的データは全員が回答していないことを考慮して数値での集計は行わなかった。

量的データはExcelで集計し、質的データはアンケート担当者が協議してコードを設定し、そのコードに基づいて集計した。

3.1.3. 結果

4月アンケートでは、69名中59名より回答を得た。（A）の挙げられた内容に関して、「どの程度授業を通じて学びたい・身につけたいと思うか」を問うた結果を数値化し、平均値昇順に並べ上位10位を挙げたものが表1である。

---

[3] http://www.surveymonkey.com/Default.aspx

表1　4月アンケート
どの程度授業を通じて学びたい・身につけたいと思うか

	N	*M*	*SD*	全く思わない	あまり思わない	ある程度思う	非常に思う	どちらとも言えない
図書館を効果的に利用するためのコツ	58	**3.62**	0.64	2%	3%	26%	69%	1
レポート・論文への資料・情報活用方法	57	**3.61**	0.70	4%	2%	25%	70%	2
図書資料の利用・活用スキル	58	**3.60**	0.65	2%	3%	28%	67%	1
レポートの書き方	58	**3.59**	0.65	2%	3%	29%	66%	1
効果的な検索キーワード方法	58	**3.55**	0.57	0%	3%	38%	59%	1
論文作成の技術・方法	58	**3.55**	0.68	2%	5%	29%	64%	1
レポート・論文・卒論のために準備すること	58	**3.55**	0.71	3%	2%	31%	64%	1
情報検索スピードを上げる	58	**3.52**	0.63	2%	2%	40%	57%	1
図書館での調査方法全般	59	3.49	0.57	0%	3%	44%	53%	0
OPAC を利用した図書検索方法	59	3.49	0.60	0%	5%	41%	54%	0

利用方法、レポート、などいわば学生生活にとって「実用的な」項目に要望が高い。また検索技術に対しても関心が高く、こうしたニーズが存在することが確認できる。

4 月アンケート（B）図書館活用法の受講のきっかけとして、アンケートに列挙した項目がどの程度貢献したかを問うた結果を数値化し、平均値昇順に並べたものが表 2 である。

表2　4月アンケート
図書館活用法の受講のきっかけ

	N	*M*	*SD*	全く思わない	あまり思わない	ある程度思う	非常に思う	どちらとも言えない
図書館の利用機会を増やしたい	58	**3.50**	0.68	2%	5%	34%	59%	1
図書館の利用意欲を高めたい	57	3.39	0.80	4%	9%	33%	54%	2
場としての図書館の魅力を知りたい	57	3.28	0.77	2%	14%	39%	46%	2
図書への親しみを高めたい	57	3.11	0.84	7%	9%	51%	33%	2
読書時間を増やしたい	57	3.05	0.91	9%	12%	44%	35%	2

「図書への親しみ」など図書に対する親近感より、図書館をどう使うかということに関心を持って受講した学生のほうが多い傾向が見て取れる。

これらふたつの結果から、「図書館活用法」開始当初はレポート・論文作成や検索技術などを念頭に置きつつ、図書館をよりよく使えるようにな

ることを期待して受講していることがうかがえる。

次に、7月アンケートの結果である。118名中71名より回答を得た。まず、学生バックグラウンドの調査結果が表3である。

表3　7月アンケート　バックグラウンド

学生回答者のバックグラウンド	*M*	*Min*	*Max*
大学通学回数(週)	3.96	1	7
大学図書館利用回数（週）	2.3	0	10
図書館利用／通学回数　（週）	0.72	0	8
読書量月平均	3.5	0	20

1週間のうち3-4日登校し、週2-3回図書館に足を運び、ひと月3冊程度本を読む、というのが受講学生の平均的な姿のようである。どちらかといえば本をよく読み「まじめ」な学生という印象である。

また、「身につけたい項目」を46項目問い、その結果平均値上位10位を挙げたのが表4である。

表4　7月アンケート　身につけたい項目

	N	*M*	*SD*	全く思わない	あまり思わない	ある程度思う	非常に思う	どちらとも言えない
図書館資料を活用してレポート・論文を書くことができる	71	3.62	0.52	0%	1%	35%	63%	0
OPACとは何かを理解し、それを利用して図書・雑誌・新聞の検索ができる	70	3.57	0.58	0%	4%	34%	61%	1
文書、図表の引用の技術・マナーを身につける	71	3.56	0.53	0%	1%	41%	58%	0
様々な検索テクニック（前方一致検索等）を使うことができる	70	3.54	0.58	0%	4%	37%	59%	1
引用・参考文献の役割を理解し、文献検索の手がかりとして使うことができる	71	3.52	0.61	1%	1%	41%	56%	0
レポート・論文作成において著作権法上注意すべき点を理解する	71	3.52	0.63	1%	3%	38%	58%	0
インターネット上のさまざまな検索方法･ツール（検索エンジンやサイト）についてその特性と注意点を理解した上でインターネット検索を行える	70	3.49	0.63	0%	7%	37%	56%	1
調査・探索の一般的な方法論を理解する	71	3.49	0.56	0%	3%	45%	52%	0
レポート・論文を作成するために収集した情報を管理できる	71	3.49	0.63	0%	7%	37%	56%	0
図書で探せる情報、インターネットで探せる情報の違いを理解する	71	3.48	0.61	1%	1%	45%	52%	0

図書館資料を活用したレポート・論文の書き方、OPAC の理解と検索など実用的な項目に要望が高い。これは4月アンケート時にも見られた傾向である。また、20位前後に著作権法についての項目があがっていたのだが、標準偏差の値が大きく(20位「著作権法の目的を理解する」標準偏差0.73)、意見にばらつきがあることが見て取れる。一方で図書の歴史、図書館の歴史といった概念的なことには要望が低い。
4月アンケート時に「身につけたい」とされた項目が、7月アンケート時に身についたかどうかを問うた結果は表の通りである。4月、7月ともに平均値の高い順に順位付けをし31項目のうち上位20位を挙げた。

表5　7月アンケート　身についたかどうか

4月の順位	項目名	7月の順位
1	OPAC を利用した図書検索方法	10
2	引用などのルール	11
3	図書館を効果的に利用するためのコツ	1
4	図書館での調査方法全般	9
5	図書館でどんなサービスがうけられるかの知識	20
6	図書資料の利用・活用スキル	3
7	電子ジャーナルの検索方法	17
8	参考文献の書き方	12
9	レポート・論文への資料・情報活用方法	2
10	図書館にてできること全般	16
11	インターネット情報検索方法	18
12	効果的な検索キーワード方法	5
13	特定テーマの資料検索方法	14
14	生涯学習の場としての図書館利用方法	27
15	レポートの書き方	4
16	情報・資料をどのように利用するか	13
17	情報活用の際のマナー	23
18	パソコンの利用方法知識	26
19	著作権を侵害しない著作物の利用の仕方	21
20	図書資料の種類	31

おおむね4月時に15位より上にあったものは7月も15位より上に入っているが、それより下になったものもある。4月・7月ともに上位にあるものは検索、効果的な利用、レポート・論文への情報・資料活用方法など、

やはり実用的な項目が中心である。

3.2. 図書館活用法講師・図書館職員アンケート

3.2.1. アンケート概要

2007・2008 年度の図書館活用法講師と、図書館職員を対象に、「活用法を通じて身につけたい項目」について、学生に学ばせたいとどの程度考えるかを問うアンケートを行った。

アンケート項目は既存の図書館活用法の授業項目から達成目標を抽出し、事前にプレアンケートとして、これらをどの程度学ばせたいかを図書館活用法講師と図書館職員に問い、その結果をフィードバックさせて決定したものである。

3.2.2. アンケート実施時期、分析方法

メールでアンケートの実施を告知し、7 月 22 日から 7 月 26 日まで 5 日間の期間に回答してもらった。

分析方法は学生アンケートと同様である。

3.2.3. 結果と学生アンケート結果との比較

この図書館活用法講師・図書館職員対象のアンケート項目は、先に述べたように、駿河台学生対象に「身につけたいとどれだけ思うか」という形で 7 月に問うたものと同じ項目である。これら二つの結果を並べたものが表 6 である。

なお、表 6 中の「平均差」は職員平均から学生平均をひいたもの、「思う差」とは、「ある程度思う」と「非常に思う」を合計%について講師/職員から学生をひいたものである。

「平均差」はすなわち、値が 0 から離れているほど両者の考えに差があるととらえられ、値が大きいほど講師/職員、小さいほど学生が強く必要と

考えていることになる。

また、「思う差」は正の%であれば講師/職員のほうが必要と考える割合が高く、負の%であれば学生のほうが必要と考える割合が高いということである。

各項目上位5位は（）つき番号で、下位5位は－（マイナス）つき番号で示した。

表6　駿河台学生アンケートと講師/図書館職員アンケートの比較

テーマ	学習達成目標	職員平均	学生平均	職員SD	学生SD	平均差	SD差	思う差
1. 大学図書館への招待	A. 講座「図書館活用法」の意義を理解する	3.49	3.04	0.71	0.64	**0.45 (1)**	0.07	5%
	B. 大学図書館とその他の図書館（高校の図書室、国会図書館、公立図書館など）の違いについて理解する	3.32	**2.96 -5**	0.52	**0.79 (2)**	**0.36 (4)**	**-0.27 (1)**	**19% (1)**
	C. 大学の学びにおける大学図書館の役割や有用性を理解する	**3.68 (4)**	3.30	0.52	0.68	**0.39 (2)**	-0.16	5%
2. 明大図書館の施設・蔵書・サービス	A. 明治大学図書館の歴史を理解する	**2.58 -1**	**2.59 -1**	0.75	**0.75 (5)**	-0.01	0.00	3%
	B. 明治大学図書館の蔵書（所蔵資料）、施設の概要と館内での所在を知る	3.49	3.16	0.64	0.65	**0.33 (5)**	-0.01	4%
	C. 明治大学図書館の所蔵資料とその特徴について理解する	3.22	3.11	**0.76 (5)**	0.71	0.11	0.05	-3%
	D. 明治大学図書館のサービス内容を知る	3.63	3.42	0.54	0.55	0.21	-0.02	0%
	E. 明治大学図書館の使い方とマナーを理解する	3.59	3.38	0.59	0.59	0.21	0.00	1%
3. 書物の愉しみ	A. 読書を通じて知識を得る楽しみを理解する	3.22	3.35	0.65	0.70	-0.13	-0.05	-2%
	B. 研究者の書物や図書館との関わりを知る	3.30	3.09	0.69	0.74	0.21	-0.05	**13% (2)**
	C. 書物について、その興味深さを理解する	3.13	3.31	0.66	0.67	-0.18	-0.01	-7%
4. 図書の歴史と図書館	A. 文字・書物の歴史を理解する	**2.85 -4**	**2.86 -3**	0.69	**0.82 (1)**	0.00	-0.13	6%
	B. 現代の図書館について理解する	3.00	3.03	**0.77 (4)**	0.72	-0.03	0.06	-3%
	C. 知識基盤社会において図書館の存在意義と重要性について理解する	3.32	3.10	0.69	0.68	0.22	0.01	5%
5. 図書、新聞、雑誌情報の探し方	A. 図書と雑誌それぞれの特徴・書誌情報の違いを理解する	3.39	3.31	0.70	0.58	0.08	0.13	-7%
	B. OPAC とは何かを理解し、それを利用して図書・雑誌・新聞の検索ができる	**3.80 (1)**	**3.57 (2)**	0.46	0.58	0.23	-0.12	2%

テーマ	学習達成目標	職員平均	学生平均	職員SD	学生SD	平均差	SD差	思う差
	C. 様々な検索テクニック（前方一致検索等）を使うことができる	3.41	**3.54 (4)**	0.55	0.58	-0.13	-0.04	2%
	D. 山手線コンソーシアムについて理解し、横断検索を利用できる	3.37	3.30	0.58	0.66	0.07	-0.08	4%
	E. 明大に所蔵がない図書・雑誌・新聞を検索できる	3.56	3.46	0.55	0.56	0.10	-0.01	0%
	F. 図書・雑誌利用に関連する「オンラインサービス（予約・貸出延長・配送・アラートサービス等）」を知り、利用できる。	3.56	3.44	0.55	0.65	0.12	-0.10	3%
	G. 引用・参考文献の役割を理解し、文献検索の手がかりとして使うことができる	3.56	**3.52 (5)**	0.55	0.61	0.04	-0.06	0%
6. インターネット情報	A. MIND(明治大学総合情報ネットワーク)が学術研究のためのネットワークであることを理解した上で利用できる	3.46	3.30	0.67	0.68	0.17	-0.01	5%
	B. インターネット成立の概要を知る	**2.66 -2**	**2.70 -2**	0.73	0.70	-0.05	0.02	-4%
	C. インターネット利用に際して注意点やマナーを理解する	3.49	3.34	0.71	0.65	0.15	0.06	0%
	D. インターネット上のさまざまな検索方法・ツール（検索エンジンやサイト）についてその特性と注意点を理解した上でインターネット検索を行える	3.39	3.49	0.70	0.63	-0.10	0.07	-5%
	E. インターネット上で検索したさまざまな情報を正しく評価・判断し、利用できる	3.54	3.45	0.64	0.60	0.09	0.03	-2%
	F. 図書館で提供するさまざまなオンライン学術資料（電子ジャーナル、データベース、電子ブック、機関リポジトリ等）についてインターネット上の公開情報との相違点を理解し、利用できる	3.56	3.44	0.55	0.53	0.12	0.02	-1%
7. 図書による情報の探し方	A. 調査・探索の一般的な方法論を理解する	3.46	3.49	0.55	0.56	-0.03	-0.01	0%
	B. 百科事典、新語辞書、年表などのレファレンスブックを使って事柄について調べることができる	3.54	3.31	0.55	0.65	0.23	-0.09	5%
	C. 文献目録、書誌などのレファレンスブックを使って図書や論文などを調べることができる	3.51	3.38	0.55	0.57	0.13	-0.02	2%
	D. 図書で探せる情報、インターネットで探せる情報の違いを理解する	3.51	3.48	0.64	0.61	0.03	0.03	-5%

テーマ	学習達成目標	職員平均	学生平均	職員SD	学生SD	平均差	SD差	思う差
8. 様々な文献の取扱い方	A 学術情報の生成と流通についての概要を理解する。	**2.90** **-4**	**2.87** **-4-**	0.63	**0.77** **(4)**	0.03	-0.14	8%
	B 様々な種類の情報（図書、論文、データ、会議録など）を、媒体（紙、マイクロ、CD-ROM、オンラインなど）を問わず、その特徴を理解し、利用することができる。	3.15	3.24	0.66	0.65	-0.09	0.02	-6%
	C 各分野の専門情報を知り、利用できる。	**2.95** **-5**	3.24	0.64	0.69	-0.29	-0.05	**-11%** **(3)**
9. レポート・論文の書き方	A. レポートと論文の違いを理解できる	3.21	3.35	**0.80** **(2)**	0.68	-0.15	0.12	-4%
	B. 問題設定ができ、論文のストーリー（構成）を立てることができる	3.45	3.44	0.75	0.69	0.01	0.06	-2%
	C. 出典表記の方法を理解し、的確に注を付けることができる	**3.73** **(3)**	3.48	0.64	0.67	0.25	-0.03	2%
	D 文書、図表の引用の技術・マナーを身につける	3.64	**3.56** **(3)**	0.71	0.53	0.08	**0.18** **(4)**	-6%
	E レポート・論文を書く上で、図や表を作成することができる	3.05	3.44	**0.81** **(1)**	0.71	**-0.39** **(2)**	0.10	**-10%** **(4)**
	F 図書館資料を活用してレポート・論文を書くことができる	3.63	**3.62** **(1)**	0.59	0.52	0.01	0.07	-4%
	G. レポート・論文を作成するために収集した情報を管理できる	3.38	3.49	0.74	0.63	-0.12	0.11	-3%
	H. 発表資料を作成でき、プレゼンテーションができる	3.20	3.32	**0.79** **(3)**	**0.79** **(2)**	-0.12	0.00	2%
10. 図書館と著作権	A. 著作権法の目的を理解する	3.48	3.42	0.55	0.73	0.05	**-0.18** **(4)**	6%
	B. 図書館における著作権の許容範囲を理解し、著作権の権利、制限等を理解する	**3.65** **(5)**	3.44	0.48	0.67	0.21	**-0.19** **(3)**	7%
	C. レポート・論文作成において著作権法上注意すべき点を理解する	**3.78** **(2)**	**3.52** **(5)**	0.42	0.63	0.25	**-0.21** **(2)**	4%
	D. 引用と著作権法との関係について理解する	3.63	3.41	0.49	0.67	0.22	**-0.18** **(4)**	7%

学生アンケート結果では、「5. 図書、新聞、雑誌情報の探し方」や「9. レポート、論文の書き方」に希望が高く、また、明治大学図書館のサービス内容を知る/使い方とマナーを理解する・文献や電子資料を使って調べるといった、図書館を使いこなす実用的な方法が知りたいと感じている学生が多いことが伺える。また「10.図書館と著作権」も高い結果となった。これはレポート・論文作成と関係してくる項目となるとさらに希望が高くなるが、著作権に関する項目にも希望が高いことが見て取れる。いっぽうで

図書や図書館の歴史・図書館の種類など、概念的な内容には希望が低い。

講師/職員アンケート結果では、「5. 図書、新聞、雑誌情報の探し方」などの実用的な内容を学ばせたいと考えていると同時に、図書館活用法の意義、大学図書館の役割、著作権、引用のルールなど実用の前に知っておくべきことを学ばせたいと考える傾向が強い。また、レポート・論文作成技術については講師/職員は学生ほどは高い数値を示さない項目が多い。

両者で共通して低い数値を示していたのは文字・書物の歴史、現代の図書館について、インターネット成立の概要など歴史的な項目である。

3.2.4. 議論

これらのアンケート結果をもとに、図書館活用法の各講義での到達目標について 7 月 23 日に図書館職員で議論した。

授業内容を改善すべき項目として、「館種の違い」「蔵書・施設の紹介」「読書の愉しみ」「様々な文献の取り扱い方」が挙がる一方、「授業の意義」、「大学図書館の役割」は学生の希望は強くないものの授業内容として残すべき項目とされた。そして継続を検討すべき項目として「明治大学図書館の歴史」「図書の歴史と図書館」、学生のレベルのばらつきを考慮すべき項目として「図書・新聞・雑誌情報の探し方」「著作権」が挙げられた。また、レポート・論文作成技術をどこまで教えるべきかについては様々な意見が出た。

こうした議論を通じ基本的情報であるこの授業の設置目的が正確に理解・共有されていない現状も明らかになり、実習法の改善、教授法の改善、課題の改善、講師間の連絡の改善も課題として挙げられた。

3.3. その他のアンケート

駿河台以外の地区（和泉、生田）履修学生対象のアンケート調査、教員対象のアンケート調査、図書館以外の学内組織（学部長・学長）へのインタビューによる調査を今後実施する予定である。

その結果から地区別学生アンケート結果の比較をおこない、図書館活用

法のプログラム評価のために分析する予定である。

4. 評価活動のこれから

以上述べてきた評価活動においては、学生アンケート・活用法講師（教職員）アンケート・教員アンケートを実施し、図書館活用法に対する共通理解を深めながらその学習達成目標の検証・設定が目指されてきた。現在はまだすべてのデータが集められ分析された状態ではなく、学内関係者へのヒアリングなど今後実施予定の調査も含め、まだ評価活動はそのプロセスの中にある。今後は2010年度のシラバス改訂に評価活動の結果を反映させることを当面の目標とするが、本来的には複数のサイクルを経て長期にわたって取り組むべき活動となると考えられる。

今回の評価活動については、開始当初は評価チームメンバー内でも「図書館活用法」の教育効果を計るためのもの、という認識が主流であったが、評価活動を進めるにつれて次第にこの評価は単純な教育効果の測定にとどまらない、という共通意識が生成されてきたといえるだろう。評価活動自体を通じて、「活用法」の講師である図書館職員自身がそのプログラムの意義や価値を再確認し、相互理解を深め、何をどのように改善すべきか第三者によらず自らが追究し、検討していくというプロセスが今後のプログラム改善に自ずとつながっていくと考えられる。特に、「活用法」に関わる職員が集まり直接意見交換や評価に関する理解を共有化する場となったワークショップでは、単にアンケート集計結果を見るだけでは出てこない多様な視点が生み出され、評価活動にとって大変重要な機会だったといえる。また、さまざまな形で収集された量的・質的データはそれぞれ一定の客観的な手法・論理で分析され、具体的なプログラム改善や教育効果測定へ活用される重要な素材となるだろう。今後まだしばらくは多くの利害関係者と協働しつつ息の長い評価活動を継続していく必要があるが、その過程で「図書館活用法」というプログラムは動的な発展を続けうるし、特色GP採択を最大限に生かし、教育に対する図書館側からの自発的・主体的な提言へつながってゆく可能性を持っている。